2023.02.09 第５回マチミチ会議（オンライン実施）

開催レポート

第５回を迎えたマチミチ会議も、昨年に続きオンライン形式で開催！

「この街路から、まちが変わる」のキャッチフレーズを掲げ、平成 30 年度より毎年開催されている「マチミチ会議（正式名称：全国街路空間再構築・利活用推進会議）」の第５回が、令和５年２月９日に開催されました。

いまだ続くコロナ禍において第５回は、もはやすっかりお馴染みになりつつある web 会議形式で開催されました。昨年よりもさらに多い、５００人以上の参加があったのは、全国から視聴が可能なオンライン形式だったからではないでしょうか。

今回も前回のマチミチ会議でも活躍したリアルタイムでコメント投稿できるシステム「Sparkup」を活用し、質問や感想、印象に残ったキーワード等を匿名で自由に投稿できる形で実施されました。

今回の会議プログラムは、

①『アメリカのウォーカビリティ／ネイバーフッドと日本での実践』埼玉大学 内田奈芳美教授

②事例紹介（最新の海外動向）

③国の取組紹介（都市局／水管理・国土保全局／道路局）

④参加者との双方向コミュニケーション 「Sparkup」を活用した質疑応答

の大きく４部構成で行われました。

全国の参加者へのメッセージ　国土交通省都市局 天河局長 による開会挨拶

国土交通省都市局街路交通施設課 清水健哉氏の司会のもと始まった第５回マチミチ会議。まずは国土交通省都市局長 天河宏文氏による開会挨拶が行われました。

天河氏はウォーカブル推進都市が 346 都市となり、ウォーカブル区域を設定した自治体数も 73 に増えていることを挙げ、我が国におけるまちなかウォーカブルへの関心の高まりを伝えました。

また、その高い関心に応えるべく、国土交通省としても都市局だけでなく水管理・国土保全局及び道路局が同席し、各局が手を取り合い連携して取り組む姿勢で臨んでいることを伝えました。

開会挨拶を行う天河局長

『アメリカのウォーカビリティ／ネイバーフッドと日本での実践』内田教授基調講演

プログラムの１つ目は、埼玉大学人文社会科学研究科　内田奈芳美教授による基調講演『アメリカのウォーカビリティ／ネイバーフッドと日本での実践』です。

講演をおこなう内田教授

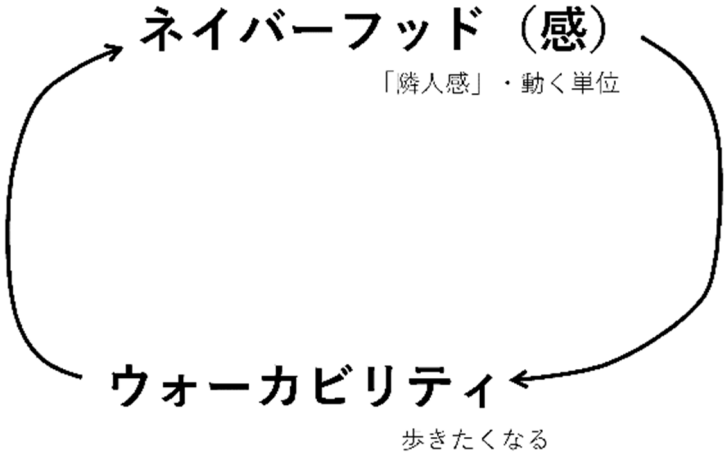
内田教授からは、サバティカル（職務を離れた長期休暇）を活用して 2021 年秋から 2022 年夏まで長期研修でアメリカに滞在された経験を踏まえ、以下の構成で講演していただきました。

０．はじめに（ネイバーフッドとウォーカビリティ）
１．ウォーカビリティ(歩きたくなる)
２．ネイバーフッド
３．日本での実践：アーバンデザインセンター大宮

それでは、構成に沿って講演の概要をお伝えします。

０．はじめに（ネイバーフッドとウォーカビリティ）

- ネイバーフッドとは「隣人感」ともいうべき、地理的に近いコミュニティのことであり、出合ったり動いたりする単位でもある。
- 地理的な意味を有する概念であるため、ウォーカビリティ、つまり歩きたくなる空間や範囲の概念と密接に関わりがある。ウォーカビリティが向上することでネイバーフッドも向上する、ネイバーフッドが向上するとさらにウォーカビリティが向上する、という循環する関係性にある。



ネイバーフッドとウォーカビリティの関係性（講演資料より）

１．ウォーカビリティ(歩きたくなる)・・・ニューヨークのアウトドアダイニングを事例として

- ウォーカビリティの重要性を書籍「ウォーカブルシティ入門」に記載された、Jeff Speck 氏の言葉をチャプター１から引用して説明すると以下のとおり。
  - 優秀な従業員を惹きつけること
  - 不動産の価値を高めること
  - （ガソリン代を）節約したお金が地域内循環に振り替えられること
  - 健康（肥満、ぜんそく）
  - 孤独感を防ぐ
- アメリカにおけるウォーカブルな都市のランキング（https://www.walkscore.com/cities-and-neighborhoods/）について、このあと実践例を解説する２つの都市であるニューヨークとシアト

ルはそれぞれ 2021 年に２位と９位、どちらもウォーカブルな都市であるが、ニューヨークはコロナ禍の被害が特に大きかった大都市、シアトルは 2020 年に警察を追い出した「自治区」が形成された都市であり、二つともコロナの影響が大きかった都市である。

■ニューヨークのアウトドアダイニング「Open Restaurants」

- アウトドアダイニングは、コロナ禍で厳しい経営を迫られていた外食産業の救済策のひとつで、路上での営業を許可するもの。パークレットのような車道部の活用はタクティカル（戦略的）アーバニズムの文脈でカウンターカルチャー（対抗文化）として始まり、メインストリーム化した活動とも言える。
- コロナ禍で加速し、車道と歩道の両側から、空間として都市景観を一変させた。

ニューヨークのアウトドアダイニングの風景（講演資料より）

- 恒久化に向けた課題もある。つまり公共空間のプライベート化が加速したことである。歩道を歩いているだけで、レストランの利用者かどうか聞かれたり、路上にレストランのゴミが積み上げられたり、ということが住民から市に対する訴訟内容に書かれている。
- これらの課題を整理しながらアウトドアダイニングのデザインガイドラインづくりが進んでいる。
- 我々日本でも整理しなければならない学びを含んでいる。誰にとっての公共空間であるのか。訪問者だけでなく住民にとって価値のある公共空間にしなければならない。

2．ネイバーフッド・・・シアトルのネイバーフッド（感）を見直す、「アーバンビレッジ戦略」

- シアトルは City of Neighborhoods と呼ばれている。ネイバーフッドとは、近接して住む「隣人感」のあるコミュニティであるとともに、計画参加のための基盤でもあり、ウォーカブルな拠点であるアーバンビレッジの単位でもあるなど、複合的な意味のある概念である。
- アーバンビレッジ戦略（1994～）は、それぞれの近隣地区の特性を活かしながら成長促進地区を集約するための戦略で、ウォーカブルな範囲での近隣をつくるもの。
- アーバンビレッジ戦略では、いくつかのネイバーフッドを以下の三つのレベルで指定する。

①アーバンセンター：複合した用途、住宅、雇用の機会を提供するセンター地区

②ハブ・アーバンビレッジ：住宅と雇用のバランスが取れた地域で、アーバンビレッジのハブとなる

③居住地域型アーバンビレッジ：商業やサービスの供給を行うが、雇用機会は多くない

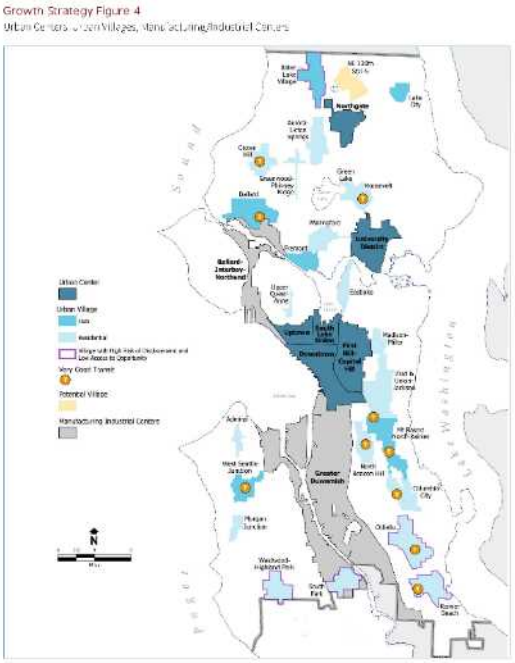
（“Seattle 2035 Comprehensive Plan”p.23）

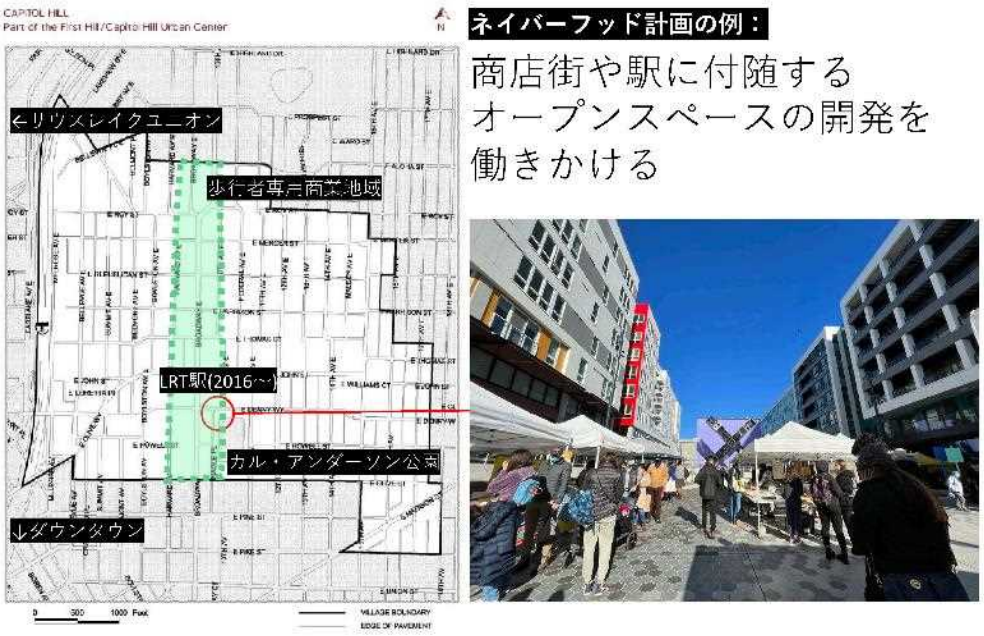
- 策定 20 年後の 2014 年に検証が行われた。その結果、20 年間にシアトルの住宅と雇用の総成長の 75%がアーバンビレッジに誘導された。
- ほぼすべてのアーバンビレッジで公共交通機関の利用者数が大幅に増加しており、車への依存度を下げ、成長による混雑の回避にも対応しているうえ、環境という文脈においても成功している。
- 公共交通と開発の関係をみると、公共交通の沿線で開発が集中していることがわかる。

（Peter Steinbruck “SSNAP REPORT2014”p.6, pp.40-41）

- （キャピトルヒルを例に）アーバンセンターは歩きたくなるスケール感としても良い。歩行者専用商業地域では 60%以上の壁面を透明にしてひさしを付けるなど、商店街や駅に付随するオープンスペースの開発を働き掛けている。

（右図：“Seattle 2035 Comprehensive Plan”p.31 から）





アーバンセンターの例、キャピトルヒル（講演資料より）

（地図は“Seattle 2035 Comprehensive Plan”p.392 から引用、加筆）

3．日本での実践・・・アーバンデザイン大宮

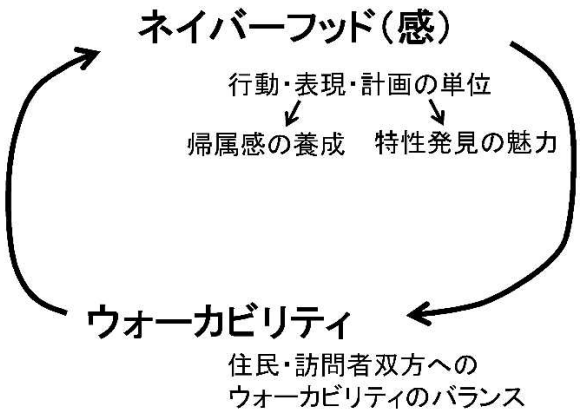
ニューヨークにおけるウォーカビリティとアウトドアダイニング、シアトルにおけるネイバーフッドとアーバンビレッジ戦略に続き、内田教授が副センター長を務めるアーバンデザイン大宮（以下、UDCO）を例とした日本での実践に話題が移されました。

・大宮では、大宮駅周辺地域の拠点を結ぶ街路空間のウォーカブル推進に取り組んでおり、これをUDCOではその形状から「インフィニティストリート」と名付けて、集中的な仕掛けづくりに取り組んでいる。
・その「仕掛けづくり」の主な取組には以下のようなものがある。
  - 大宮ストリートテラス（飲食店街のコロナ特例占用）
  - ストリートランチ（都市計画道路整備のために生じた空地をつかったテイクアウトランチ）
  - ストリートプランツ（植栽を地元に維持管理してもらうことで、緑豊かな街並みの形成、植木など地域産業の応援、地域のコミュニティの醸成のサイクルをまわす仕組み）
  - ストリートデザインスクール（ストリートを活用するための実践型スクール）

大宮駅周辺における UDCO の取組（講演資料より）

講演の最後には、冒頭に掲げた「ネイバーフッド」と「ウォーカビリティ」のサイクルを表現したダイアグラムを再度お示しいただき、「この循環を意識することが大事。ネイバーフッドは帰属感の養成が大事であり、それぞれの特性・魅力を発見することで培われる。そのとき、ウォーカビリティは歩いて暮らせるネイバーフッドの空間として近隣感を意識させるために重要である。そのためウォーカビリティは、訪問者だけでなく住民へのバランスも重要である。」と語り、講演を締めくくりました。

「循環」を意識してつくっていく



ネイバーフッドとウォーカビリティの関係性（講演資料より）

事例紹介（最新の海外動向）

プログラムの２つ目は、「ウォーカブルなまちづくりの海外事例紹介」について、マチミチ会議事務局（R4 年度国交省業務受託 JV）より説明しました。世界的な潮流となっている「人中心」の都市づくりなかでも先進的な取組を行う都市として、ニューヨーク（アメリカ）、パリ（フランス）、ロンドン（イギリス）、バルセロナ（スペイン）について紹介しました。ここでは、内田教授の講演で取り上げられたニューヨークの除く３都市の代表的な取組・動向をご紹介します。

森川氏（R4 年度国交省業務受託 JV）

１．パリ（フランス）

- パリでは、自宅から徒歩また自転車で 15 分以内に、学校、職場、食料品店、医療機関、公園、スポーツ施設等の日常生活におけるあらゆる機能にアクセスできる「15 分都市」を目指している。
- また、2020 年の新型コロナウイルスによるロックダウン期間を経て、密集を緩和するため、バスの増便、自転車レーンの拡充市内新設 50km、歩行者空間の拡充などの復興プランが次々に実施されている。

パリの 15 分都市のイメージ（説明資料より）

2．ロンドン（イギリス）

・Healthy Streets Approach は、ロンドン市民が車の使用を減らし、徒歩、自転車、公共交通機関の使用を増やす試みである。“Healthy”の語の通り、このアプローチはロンドン市民の健康増進を主目的としているが、「人々が交流できる公共スペースの創出」「大気汚染と騒音公害を低減」「地域の経済的利益の創出」などの副次効果も期待している。

Healthy Streets for London の 10 の指標と健康増進効果の説明（説明資料より）

3．バルセロナ（スペイン）

・碁盤目状に整理された９つの街区を１つの大きな街区スーパーブロック、400m 四方として捉え、その内部への自動車の進入を抑制し、市民の安全・安心・快適な生活を実現する計画である。

・市内におけるソーシャルスペースの拡張を目的としており、スーパーブロック内の空間の活用方法は近隣の市民によって決定されるため、市民にとって関わりの深い場所となりやすい。

スーパーブロックのイメージ（説明資料より）

国の取組紹介

プログラムの３つ目は、国土交通省の関連各局（都市局、水管理・国土保全局、道路局）からの取組紹介です。

１．都市局（街路交通施設課）

都市局街路交通施設課からは松岡係長より情報提供を行いました。

国土交通省都市局街路交通施設課　松岡係長

松岡係長からは、令和４年１１月に行われたマチミチ study 現地勉強会 in 岡山の盛況ぶりや、そこで行われたワークショップでは改めてウォーカブルとは何かを議論し、その結果「人」が中心であるという共通理解が得られたことが報告されました。

また、令和５年度予算案において、日常生活を営む身近なエリア（ネイバーフッド）の充実を図るべく、日常生活を支える地域生活拠点の形成に関する支援が拡充され特に、まちなかウォーカブル推進事業では、既存建造物を活用し、デジタルデバイス利用環境を備えた滞在・交流施設（通称“まちなかハ

ブ”）の整備や、都道府県が事業主体となる場合の都道府県道等が支援対象に追加されることが報告されました。

まちなかウォーカブル推進事業の支援対象の追加（通称：まちなかハブ）

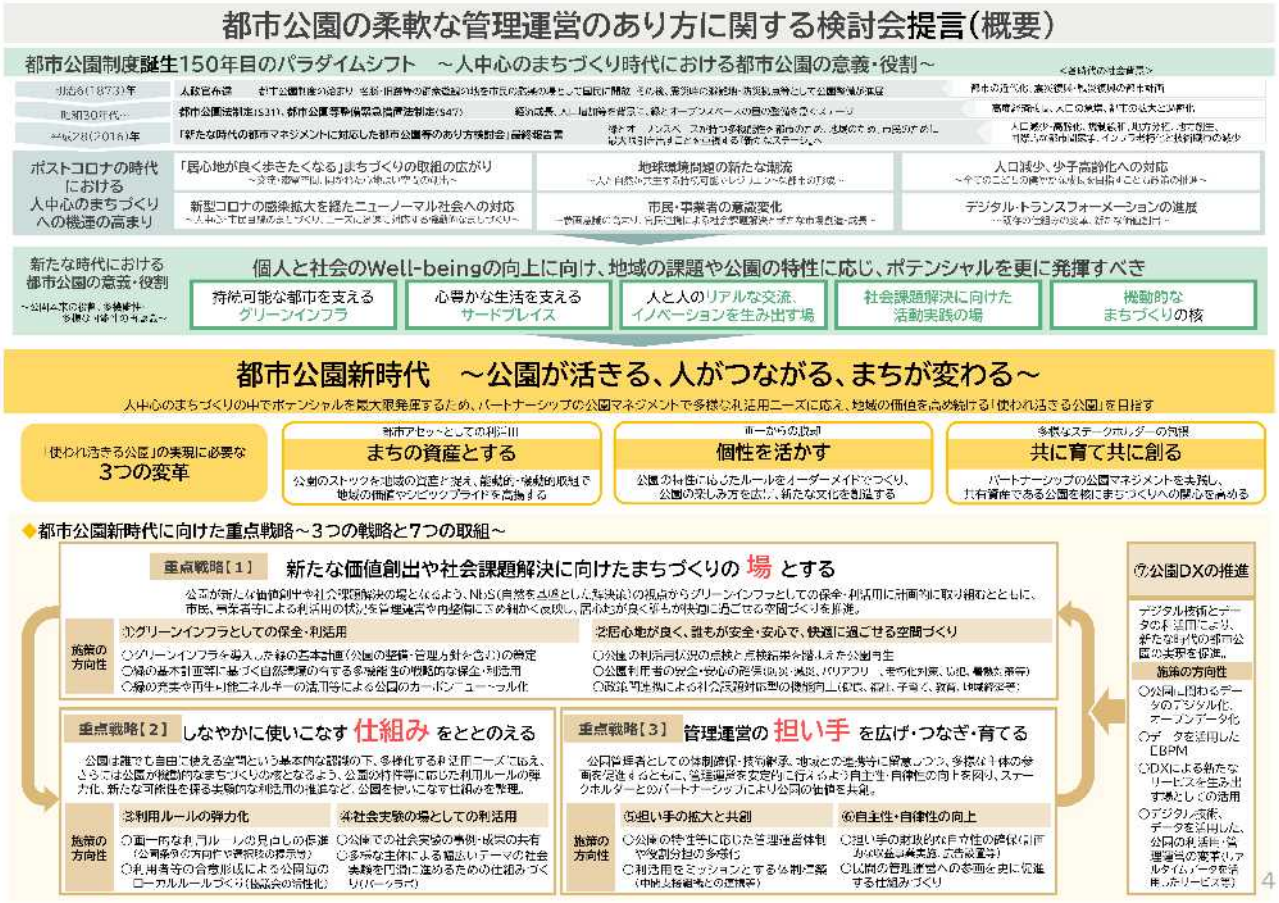
2．都市局（公園緑地・景観課）

都市局公園緑地・景観課からは長尾係長より情報提供を行いました。

国土交通省都市局公園緑地・景観課　長尾係長

長尾係長からは、ウォーカブルなまちなかの目的地のひとつとしても重要な都市公園について、近年事例が増加している公募設置管理制度（Park-PFI）の制度概要の説明がありました。

また最近の話題として、都市公園の柔軟な管理運営のあり方に関する検討会提言では「場」と「仕組み」と「担い手」の３つが重点戦略として打ち出されていること、公園の活性化に関する協議会制度では公園利用のローカルルールを地域で定めていく仕組みが用意されていること、グリーンインフラ活用型都市構築支援事業ではまちなかウォーカブルのためにも必要なグリーンインフラの整備について支援が受けられること、などについて説明がありました。



都市公園の柔軟な管理運営のあり方に関する検討会提言（概要）

3．水管理・国土保全局

水管理・国土保全局河川環境課からは村山課長補佐より情報提供を行いました。

国土交通省水管理・国土保全局河川環境課　村山課長補佐

村山課長補佐からは、全国にムーブメントが広がっているミズベリングと、川とまちの一体的な活性化を図るかわまちづくり支援制度について説明がありました。

ミスベリングは全国の取組がミスベリング事務局調べだけで 78 あり、独自に活動している地域も多数あること、福岡・中州での取組のように多くの人々が注目を集めるイベントも育っていること、ミズベリング インスパイアフォーラムでは約 500 人が参加し大盛況だったことなど、盛り上がりの様子が伝えられました。またかわまちづくり支援制度については盛岡地区のかわまちづくりが紹介され、河川空間と公園、まちの一体的な再整備でまちなかにも賑わいの波及効果が起きていることが伝えられまし

た。

また、河川空間マネジメントに民間事業者の参入を支援する制度については総事業費の下限値要件を撤廃するなど、より民間事業者の参入を促進するための見直しが行われる予定であることが報告されました。

ミズベリングプロジェクトのこれまでの取組

4．道路局

道路局 環境安全防災課からは番場係長より情報提供を行いました。

道路局 環境安全防災課　番場係長

番場係長からは、ウォーカブルとも密接に関わる、賑わいのある道路空間を指定する「ほこみち（歩行者利便増進道路）」制度について説明がありました。

ほこみちは、これまで「通行の用に供する」ことが大前提だった道路空間について、歩道等の中に“歩行者の利便増進を図る空間 を定めることが可能になるという画期的な制度です。制度として法律に位置づけられているため、ほこみちによる道路空間の利活用は、警察等の関係機関との協議が進めやすくなるほか、無余地性の基準にとらわれず道路占用ができる、公募占用制度の活用により長期間

の占用が認められる、占用料が減額される、といったメリットが挙げられました。また、現在活用されている歩行者利便増進道路の事例の紹介もありました。

ほこみちの活用事例

質疑応答

ここからは街路交通施設課の太田対策官による進行のもと、内田教授も交えた質疑応答となりました。

今回のマチミチ会議ではリモート参加者の皆さまとのコミュニケーションツールとして「Sparkup」を用いており、スマートフォン上の掲示板に感想や質問が届く仕組みになっています。既に多くの質問・感想が寄せられており、そのなかから「いいね！」マークの多い質問を中心に取り上げていきました。

国土交通省会場の様子

ウォーカブルだけでなく各局の制度の疑問点に関するやりとりのあと、太田対策官から内田教授への質問として行政への期待や現状の評価について確認したところ、内田教授からは「大宮に関してはUDCO の取組を支援してくださり、行政には感謝している。警察とも毎年の積み重ねのなかでご理解をいただいている。ただ、制度が複雑すぎて担当でも整理しきれず、苦心している。ワンストップ化

してほしいという気持ちは理解できる」というコメントがありました。スパークアップにも同様の意見が多数挙がっており、各局のさらなる連携が求められていることが確認できました。

「試行錯誤がキーワード。まずはアクション！」街路交通施設課 服部課長による閉会挨拶

閉会挨拶は街路交通施設課 服部課長より。内田教授の講演によりネイバーフッドの理解が深まったこと、各局から連携した取組の情報提供があったことや、制度の複雑さにも触れられ、「なにかおもしろいことやろうよ、くらいの姿勢で良いのではないか。明確なゴールが見出しにくいなかで試行錯誤（トライアル）することがキーワードになるのではないかと思っている。まずはアクションが大事だ！」という力強いメッセージとともに、第５回マチミチ会議は閉会となりました。

街路交通施設課 服部課長

【第５回マチミチ会議　開催概要】

日時：2023 年２月９日（木）14：00～16：00

場所：web 会議形式

主催：国土交通省 都市局 街路交通施設課

～プログラム～

１．開会挨拶

２．基調講演【埼玉大学人文社会科学研究科内田奈芳美教授】

３．事例紹介（最新の海外動向）

４．国の取組紹介

５．質疑応答

第５回マチミチ会議開催案内